NEWSLETTER No.90
ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music
January 31,2014

一般社団法人
東洋音楽学会
会報
第90号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号　TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://tog.a.la9.jp

目　次

第 64 回大会レポート …… 1
ICTM（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ …… 9
会員の受賞 …… 10
通常理事会・総会議決事項のお知らせ …… 10
会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせなど …… 11
第 31 回田邉尚雄賞アンケートのお願い …… 11
東日本支部からのお知らせ …… 11
国際シンポジウムのお知らせ …… 12
会員異動 …… 12
図書・資料等の受贈 …… 13
新刊書籍 …… 13
新発売視聴覚資料 …… 15
編集後記 …… 15
第２回定時社員総会議事録（抄）・添付書類 …… 16

第 64 回大会レポート

（2013 年 11 月 9～10 日／静岡文化芸術大学）

第１日（11 月 9 日）

◇浜松市楽器博物館見学会

大会に先立ち、浜松市楽器博物館にて、展示見学と館長・嶋和彦さんによる講義が催された。浜松と言えば“楽器の街”というイメージがある。その浜松に、楽器博物館はよく似合う。1995 年の開館以来、実質的に同館を育てて来られた嶋さんから、館の歩みについてご説明をいただいた。決して恵まれたとは言えない環境の中で、人々の力を生かした独創的な取り組みによって成果を蓄積されてきたご努力に感銘を受けた。展示の内容も充実していたが、とりわけ所蔵楽器によるＣＤをシリーズで刊行していることは特筆されてよい。所蔵楽器を演奏する楽器博物館は少なくないが、第一線の演奏家によるＣＤを系統的に発表している館は国内では珍しい。高い評価も頷ける。学会の大会にふさわしく、楽器博物館のあるべき姿の一つを示していただけた。浜松市楽器博物館の益々のご発展をお祈りする。　金城厚

◇講演１　「楽器博物館が担う『国際』と『学際』」

講演者の西岡氏は、半世紀前にロンドンにあるホーニマン楽器博物館を訪れたとき、ところ狭しと並べられている楽器を見て「もったいない」と感じたという。それ以来、世界各地の楽器博物館を訪れたが、その印象は変わらない。展示品の数は多いが、個々の楽器に関する情報が乏しく、多様で豊かな情報を発しうる楽器のポテンシャルが十分に生かされていないと感じたからだ。展示の作り手である音楽・楽器の専門家が、数多くの楽器に囲まれること自体に満足してしまう好事家的性癖をもっていることに、その一因があると氏は考える。

西岡氏は、世界各地で行なった現地調査の経験から、楽器のもつ豊かな情報はモノとして見るだけでは伝わらないことを痛感されたのだろう。一見変哲のない「できの悪いラッパ」の音が、実は「神に聞こえる音楽を奏でるためのブレスの音」であることを発見することが創りだす知的な興奮。楽器博物館は、そのような発見の「入り口を開けるとっかかり」の場であるべきだという氏の語りは熱い。また展示における映像メディアの効力にも注目し、文字による説明なしでも気付くことが多くあると主張する。

このような西岡氏の考えは、自身設立に関わられた浜松楽器博物館の展示手法に反映されている。ガラスケースを用いないオープン展示や、楽器体験ルームなどがその例である。氏が楽器博物館に期待する、「楽器が発信する情報と来館者の多様な関心がぶつかり合う場」という役割が、実際の展示に具体的に生かされている。

講演は「単純な話」と前置きして始められたが、楽器の展示を、研究者や好事家だけでなく一般来館者にとってより意味のある場にするために努力する関係者への力強いエールとして拝聴した。また、講演の論点はフィールド体験をどのように伝えるかという研究者がかかえる根本的な問題に通じており、音楽研究の社会的意義に関する議論にも一つの視点を提供している。

最後に、日本で唯一の本格的な楽器博物館をもつ浜松市の地域性に相応しいテーマと内容をもつ講演を企画された実行委員会にも賛辞を贈りたい。　寺田吉孝

◇講演２　「浜松周辺の邦楽文化―浜松まつり他について―」

題目に明らかなように、開催地の浜松に即した内容だった。講師の竹内氏（非会員）は、父君の実家の家業が長唄三味線だった関係で、早くから長唄三味線と囃子を稽古し、囃子では舞踊会などでの相当な舞台経験もあるという方である。大学卒業後、日本楽器製造、現ヤマハ(株）に就職して東京から浜松に移住、勤務先では一貫して管楽器の設計、研究開発に従事された。定年後もその地を離れることなく現在にいたっているのだが、若いときの実技経験を生かしながら、積極的に邦楽に関する講演や実技指導などに当たっているほか、非常勤講師として大阪芸術大学の授業も担当しておられるという。

浜松およびその周辺では、師匠に入門して稽古をつけてもらうというのとは違った、市民が主体的に邦楽に接してそれを楽しむ、という形が少なくないということで、多数の事例が、映像を使いながら紹介された。音楽としては三味線音楽、能楽、雅楽、地域は、浜松、磐田、袋井、掛川の４市だったが、講演は長唄と「浜松祭り」を中心に進められた。

典型的な形は、市民が同好会を作って実技を練習し、必要あるときのみ専門家を頼んで指導を受ける、というもので、専門家の助言がそれまでの会のやり方と一致しないときは、会の方針にしたがうのだという。自主的な三味線同好会、横笛同好会、屋台囃子同好会のほか、公民館が関わるものがあり、いずれも専門家（師匠）が取り仕切るものではない。

数多く示された事例の中で、とくに感心したのは子供の参加で、浜松まつりの屋台での長唄演奏では、小学生が囃子を担当する。祭り本番を控えた小学生が、囃子の合奏練習を、楽器を使わずに唱歌で行う情景は、音楽教育専門の会員でなくても興味を持ったに違いない。

扱われた話題の数が多く、その全体を報告することは、とてもできないのだが、ひとことでいって、聞いてとても楽しい講演だった。会場で見かけた、名札を付けていない聴講者、つまり非会員の聴講者の数が、最近のどの公開講演会より多かったように思う。これもやはり浜松という風土だからなのかな、と思った次第である。　蒲生郷昭

◇上演　「浜松市無形民俗文化財　遠州大念仏」

念仏踊り系の芸能は遠江・三河に密に分布しており、多様な芸態がある。私も三河側のいくつかを実見しているが、遠州大念仏は初めてで大変興味深かった。浜松市指定だが主に旧浜北市周辺の大念仏が「遠州大念仏保存会」を結成し、衣装や芸態の統一をおこなって活躍しているようで、現在約 70 組もあるという。ふだんは新暦７月初めから 10 日間の稽古を経て、盆の３日間に初盆（しょぼんと言っておられた）の家々を廻る。

踊子達が持つ桶太鼓という文字通りタガのはまった桶に両側から枠付き皮面を張った中型の太鼓と、そしてなんといっても双盤という大型の鉦が遠州大念仏の特徴である。道中囃子の時から、一瞬ほら貝かとおもわせる柔らかい音が響いてきた。庭に入ってからは一対の鉦を向かい合わせに置いて、太いたこ糸を束にした大きな撞木で叩くのだが、２個の鉦は音が少し異なるので微妙なうなりを生じる。夜の庭先を想像しながら聴いた。

桶太鼓は道中囃子と庭入りのときは細長バチを、踊りの時は短い２本のバチを使うのだが、皮面を叩くよりもカッカッという縁叩きの方が圧倒的に多い。この音を揃えるのが難しいという。念仏歌は中高年男性およそ 20 名。唱枕（ソロ）とその他大勢が「なむあみだぶつ」とか「サアサドッコイセ」などと、音頭一同形式で非常にゆったりとうたい、それに合わせて踊子は振りをつけながら太鼓を叩いていくのだが、踊子もメリスマに富んだ難しい節回しの歌を覚えていなければ、振りを合わせることはできないだろう。青年男女の踊子には奥中先生の学生さんも２人参加しているという。体験を聞きたかった。

唱枕の方はかなりな高音をきれいに流して素晴らしいお声であった。特に中間の和讃は本当にありがたい気分になった。そして合わせる皆さんもあまりにぴったり音高が合っていてびっくりした。「稽古したからね」とおっしゃっていたが。事前に歌詞や旋律の説明を聞き資料も渡されていたが、上演中は舞台に見入ってしまい、歌詞を追っかけるのも途切れがち。今これを書くためにビデオを見直しながら、改めて素晴らしさに酔っている。　入江宣子

◇田邉尚雄賞授賞式・受賞祝賀会

第 30 回田邉尚雄賞授賞式では、授賞理由の説明の後、薦田治子会長から、三島暁子さんと山寺美紀子さんに賞状と賞金が手渡された。

授賞理由では、三島さんの『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』は、南北朝・室町時代の雅楽を、楽書や古記録に基づいて丹念に解明した歴史的研究であり、天皇・将軍・地下楽人の三者の連鎖・連係に着目し、これを政治や社会、文化の中に位置づけて考察して、人間の音楽活動を生き生きと描き出したことが高く評価された。

山寺さんの『国宝「碣石調幽蘭第五」の研究』は、琴曲の弾奏法を論じた唐代の同書を詳細に解読・分析した歴史的研究であり、日本における伝存の軌跡をたどり、極めて難解なこの資料を翻刻、現代語に訳し、その指法と調弦法を丹念に解き明かしたことなどが高く評価された。

祝賀会では、三島暁子さんに塚原康子さんがお祝いの言葉を述べ、三島さんの長年にわたる地道なご研究の積み重ねが今回の受賞研究に結実したこと、また、三島さんがご出身の歴史学を土台としていることが、魅力的な研究成果に結びついていることを讃えられた。三島さんからは、これに続く体源抄の研究へも長期覚悟で取り組む決意が表明された。

山寺美紀子さんには明木茂夫さんがお祝いの言葉を述べ、山寺さんが中国文学の専門で、漢文のしっかりした素養の上に日本の古文献、そして琴学の研究が積み上げられて受賞論文に結実したことを讃えられた。山寺さんからは、上海音楽学院の陳応時氏との出会いがあったこと、中国の音楽研究者たちが岸辺氏らの研究に学んでいる様子に触発されたことなどの思い出が語られた。　金城厚

第２日（11 月 10 日）

◇研究発表１-A（司会：澤田篤子）

盲僧の琵琶入り寺院法要―現行の次第構成とその音楽的内容―

星野和幸

福岡県妙音寺の玄清法流「夏祈祷きうり加持大護摩供養会」と、鹿児島県中島常楽院の常楽院法流「妙音十二楽」について、発表者自身による2012年の現地調査をもとに考察を行ったもので、現在の次第とその内容が配布資料や映像も含めて詳しく紹介された。盲僧琵琶に関する通行する文献類の情報は一世代前のものが多いので、現況を知ることができ有意義であった。発表者の調査によれば、現在はほとんどが晴眼者であり、活動は宗教活動のみとなっており、芸能活動は廃絶しているとのことであった。こうした近年になってからの変化にも思いを致さざるを得なかったが、根元に立ち返って、そもそも盲僧による法要、とくに「妙音十二楽」はどのような経緯で成立したのかが気になった。質疑で出された「十二」の意味については、宗教的意義は不明との回答であったが、十二はともかく楽を添えることに意義を有する法要であろうから、中世に盛んに行われた管絃の加わる妙音講、法事講などとの関係も気になるところである。起源をめぐっては、口承よりも、文献に徴証を求めたり、場合によっては推論も必要になると思われ、星野さんの研究の方向とは異なるかも知れないが、今後にこうした問題についても何らかの見通しが示されることを期待したい。　遠藤徹

東照大権現御神忌法会の構造とその変遷について

―「三箇日」を中心に―

服部阿裕未

服部さんの発表は、日光で行われた東照大権現御神忌法会について、楽家、江戸幕府の儒官の林家、徳川家、僧侶、社家など、立場の異なる者が残した記録類を総合して、一周忌から二百五十回忌に至るまでの十数回の儀式の次第とそこで奏された音楽・芸能を整理し、その史的変遷を、一周忌から十三回忌（第一期）、二十一回忌から三十三回忌（第二期）、五十回忌以降（第三期）の三期に分ける試案を提示したものであった。音楽史ではこれまでにほとんど考察されてこなかった儀礼であるから、こうした基礎的な実態の解明だけでも一定の意義は認められるが、さらに研究を深めるには、音楽史上の位置づけが問題となるであろう。この儀礼の背景には、質問にもあった歴代将軍の法会における位置（回答では、今後の課題とのこと）をはじめ、公武関係、天台宗の儀礼の復興や関東における拠点の形成、当地における神仏習合、天海僧正個人の問題等々、様々な問題が複雑に交差していると思われる。薄く広げただけの散漫な論に陥ることなく、また周辺の研究に過度に引きずられることなく、いかに音楽史に有意義な原石をうまく拾い出せるかが今後の課題になるように思われた。　遠藤徹

江戸初期の謡本におけるツヨ吟に関連する胡麻の配列

丹羽幸江

丹羽さんの発表は、元和六年（1620）刊行の観世流初の公認の謡本である『元和卯月本』を対象に、上歌の末から三句目の二連続下げ胡麻の現れ方、という一点から、同謡本の刊行された江戸初期にはツヨ吟、ヨワ吟につながる謡分けがすでに存した可能性を指摘したものであった。発表者によると当該箇所の二連続下げ胡麻の配列パターンはツヨ吟を示すものであり、ヨワ吟にあたる箇所ではこうしたパターンは現れないとのことである。配布資料では脇能、鬘能、修羅能の胡麻の配列の一覧も提示された。こうした特徴的な指標を探り出して、その背景にある大きな動向を推察する方法は、古譜

の分析による歴史研究の強みがもっとも効果的に現れるものであり、面白い発表であったように思う。ただ現段階ではごく僅かな切り口であるし、記譜と実演の関係性も単純ではないであろうから、より確実な論に昇華されることを待ちたい。

遠藤徹

◇研究発表１-B（司会：高松晃子）

1980 年代以降の金属弦ハープの復興運動

―アン・ヘイマンの記譜法をめぐって―

寺本圭佑

1980 年代以降、金属弦アイリッシュハープの復興に影響を与えた、アン・ヘイマンの記譜法の変遷について。ヘイマンの記譜法の鍵は、金属弦ハープ特有の「ダンピング（消音）技法」の表記方法にある。赤と黒の二色刷から、黒丸と白丸を用いたものへ、そして現在の×印と指番号による合理的な表記に至るまでの改良プロセスが明瞭に説明された。現在の伝承の場では、従来の口頭伝承よりも、ヘイマンの記譜法に基づく教則本が多く使用されている、という指摘からも、金属弦ハープ普及におけるヘイマンの貢献度の高さが窺えた。フロアでは主に、金属弦ハープとナイロン弦のネオ・アイリッシュハープの違いに質問が集中した。ネオ・アイリッシュハープはペダルハープと同じ奏法が用いられ、楽譜上にダンピング技法の指示はないこと。また、伝統的な金属弦ハープのフレームは一つの木をくり抜いたものであるのに対し、ネオ・アイリッシュハープは幾つかの板を張り合わせて作られているとの回答があった。

下崎久美

フィンランドの音楽学者ヴァイサネンによる 20 世紀前半のカンテレ復興活動

―伝統的なカンテレ演奏の保存・旋律の採譜と今日での演奏―

畑智子

フィンランドの民族音楽学者ヴァイサネンが行った、20 世紀前半におけるカンテレの旋律蒐集活動と、今日のカンテレ演奏における旋律の使用について。カンテレは、元々弾き語りで演奏されていたが、ヴァイサネンが採譜した旋律には詩がほぼ併記されておらず、現在では歌の伴奏よりも即興的な演奏が一般的となっている。発表では、ヴァイサネンの蒐集活動から数十年以上を経た現在の展開に重点が置かれ、現代作曲家による編曲作品や、旋律の冒頭部分を発展させた即興演奏の学習風景、そして二人の奏者による即興的な掛け合いの様子が映像で具体的に紹介された。結論として、今日の演奏では、ヴァイサネンの旋律を踏まえた即興に加え、楽譜を用いない即興も行われているとあったが、特に後者の場合、奏者同士の即興についての共通認識はどのように形成されているのだろうか。フロアから挙がった「即興演奏の定義」に対する見解も含め、今後明らかにされることを願う。

下崎久美

ミャンマーにおける西洋楽器の受容に関する一考察

丸山洋司

19 世紀末、イギリス植民地時代のミャンマーに伝来したピアノの受容について。ミャンマーでは、ピアノはサンダヤーという名称で呼ばれ、竹琴パッタラーの奏法に倣って演奏される。具体的には、親指と人差し指を基本とする運指法や、白鍵をパッタラーの音高に合わせて調律する等、西洋由来のピアノ奏法とは異なる。パッタラー奏者の演奏する様子と、丸山氏自身が受けたサンダヤーのレッスン風景が映像で提示され、両者の奏法の類似性を興味深く見て取ることができた。結論では、ミャンマーにおける西洋楽器の受容は、カルトミの言う「異文化の部分的移植」ではなく、「既存の文化を豊かにする創造的な試み」として、肯定的に捉え直そうとする独自の見解が述べられた。質疑の一つは、ミャンマー人の西洋楽器に対する認識を問うものだったが、異文化を妥協して受け入れる者と積極的に取り入れる者の間にある認識の差異がどのようにして生じているのか、今後の追跡調査によって明らかにされることを期待したい。

下崎久美

◇研究発表２-A

〔パネルディスカッション〕

グローバル化時代のインド音楽と舞踊

パネリスト代表：寺田吉孝

パネリスト：田森雅一、竹村嘉晃

寺田によれば、本パネルの背景にある研究モデルは「文化の還流」である。これは、発表者３名が関わるプロジェクト「現代インド地域研究」（人間文化研究機構）の文化・宗教研究班（民博拠点）が提唱するものである。インド人ディアスポラに焦点を当て、本国との相互関係を動態として考察するモデルであると報告者は理解した。

まず寺田が、トロント市のインド系およびスリランカ系タミル人の舞踊を例にとり、本国とディアスポラ間の動態的関係を報告した。古典舞踊バラタナーティヤムの発表会の盛大さを例にして、ディアスポラと本国音楽界の密接なつながりと双方向のヒトの流れが紹介された。またローカル性を帯びたタミル人の民族舞踊に対する意識の高まりがインド国外で促進されていることや、本国ではタブーとなる上演形態の存在も報告された。

竹村はグローバル化の事例として、シンガポールへのインド移民の音楽・舞踊の姿を報告した。19 世紀末に始まった初期インド人移民者は音楽芸能には関わらなかったが、1950 年代に公演した有名なインド舞踊団が刺激となり舞踊を習う

ディアスポラが増加し、音楽・舞踊を教授する教育機関が複数設立された。有力な機関 Bhaskar's Art's Academy の創設者のライフヒストリーの紹介から、中国、マレー、インドの要素が混合した音楽・舞踊のハイブリッドな様相や、フュージョン的音楽の性質が紹介された。

田森は、北インド・ラージャスターン州からフランスに渡り活躍した音楽家の事例を紹介した。グローバル化による西洋での音楽経験から、音楽家の固定化された階層社会を越えたメンバー構成を行うマネジメント方法を採用した事例、そのローカル文化への影響、また一演奏家からプロデューサー、ディレクターなどの役目をもこなすようになる音楽家の変容の事例の紹介があった。フロアからは、こうした動態の将来の姿がどうなるか、との質問などがあった。　小日向英俊

◇研究発表２-B（司会：田中多佳子）

〔共同発表〕

フォークトラント周辺地域における楽器産業の様相

横井雅子、薩摩秀登（非会員）、白石美雪（非会員）

「音楽の町」浜松にふさわしく、テーマは楽器産業である。エルツ山地をはさんだドイツのフォークトラント地方とチェコの西ボヘミア地方は、ともに楽器生産の拠点として発展したが、現在では違いが鮮明になっているという。何が原因でどんなふうに変わってしまったのか。視点の異なる研究者がひとつの問題に取り組む共同研究のおもしろさが、よく伝わってくる発表であった。

歴史学者の薩摩氏によると、この地域の楽器生産は 17 世紀前半に始まる。背景には、宮廷に供するための弦楽器の需要、鉱山町ならではの管楽器生産の技術があり、同族経営がわざの伝達を保証してきた。ところが、現在ではチェコ側がドイツ側にやや水をあけられたような格好になってしまった。その理由について、白石氏は地域研究の視点から次のように説明する。ドイツのクリンゲンタール市は、楽器製作の専門学校、地元演奏団体、音楽関係の博物館、アコーディオン・コンクールやハーモニカ・ライブといったイベントを組み合わせて音楽を観光資源化し、楽器産業（現在ではフリーリード楽器の産地として名高い）をもり立てている。イベントには人口 9067 人の地元住民が総出で参加することで、「音楽の町クリンゲンタール」を単なるかけ声に終わらせない仕組みになっている。ただ、コンクール用に新曲が委嘱されるか、とのフロアの問いに対しては否だったことから、コンクールがアコーディオンのレパートリー拡大に寄与するまでには至っていないようである。

最後に、横井氏がより広い視点から現状を分析し、２地域の相違をわかりやすく示した。フリーリード楽器という特殊性が奏功したこと、スキーの名所としての知名度があったからこそ夏場の「音楽の町」ブランドがうまく機能したことは、体制の違い以上の利をドイツ側にもたらしたのである。対してチェコ側には不運が重なった。楽器制作の学校が移転するだけで、これほどの打撃を与えるとは。コマを１つ動かすことは、大きな責任を伴うのである。　高松晃子

◇研究発表２-C（司会：遠藤徹）

『律呂新書』における楽律制定方法

―中村惕斎およびその子弟の研究を中心として―

榧木亨

本発表は、東アジア楽律史におけるメルクマール的存在である蔡元定著『律呂新書』が、中村惕斎及びその流れを汲む学者たち（斎藤信斎・蟹養斎ら）に如何に受容されたかについて、特に候気術に焦点を当て考察したものであった。候気術は現代人の目には奇異に映るが、候気の章は、同書において、性理学の中心概念の一つである“気”と音律とを結びつける重要な役割を果たしており、その点、氏が候気術に着目した点は、極めて適切であり、意義深いものと言える。今後、日本を含む近世東アジアの儒者による“楽”研究の実態を、思想的背景を含め全面的に明らかにするものとして、さらなる展開が期待される。候気術は音律制定法と言えるか、との会場からの問いに対し、氏は、同書における候気の章の構成上の位置づけ、及び候気によって律管を選定し得る点より、可とし、また、中村惕斎らは候気術を否定したと言えるかとの問いに対し、彼らは積極的には肯定せず、よって消極的ながらも否定的と言えるとした。　山寺三知

『管弦音義』における「返音」

高瀬澄子

本研究は、『楽書要録』の旋宮図に同書所収の返音輪転図が類似することから着想したとのことで、フロアからも主にこの図に関する質問やコメントが寄せられた。旋宮図は三分損益に基づく一定の音程関係で音が旋るが、返音輪転図はその音程関係が短三度下（羽位）、もしくは長三度下（七声にない音位）と二種あって整合性を欠き、出現する調子も七つのみ。つまり、旋宮図とは似て非なるものである。なぜこうした矛盾を抱えながらも輪転すると理論づけたのだろうか。この七調子の返音には、御遊や声明曲中で実際に用いられる調子関係が含まれること、基準とした横笛の孔にある音律に限られることなどがその一因として考えられるが、推測の域を出ない。また、「声明」の語源が音韻学であるように、「返音」も別義の語が転用されたものと見るべきか。日本における律呂の変容、演奏実践との関係など、様々な課題に繋がる可能性をもつテーマといえそうだ。　近藤静乃

◇研究発表３-A（司会：永原恵三）

芸の解釈とライフヒストリー

― 一舞踊家への聞き取り調査を通して―

笠井津加佐

個人に対する聞き取り調査は本学会会員が関わる領域や近隣領域でも活用され、文字資料の乏しい領域では基本的な方法の一つでもあるが、昨今、歴史学、特に近現代史でもライフヒストリー（オーラルヒストリー）として活用されている。本発表はその歴史学における手法に依拠し、故有り第一線を退いた一人の舞踊家花柳禄美之氏に密着した聞き取り調査の結果や関連資料から、「鷺娘」の表現を通して禄美之氏の芸の解釈を記述・分析するものである。「瀕死の白鳥」の影響が語られ、衣装の変化も華やかな「鷺娘」だが、禄美之氏は古風な演出や素踊りにこだわったという。質疑応答では、古風な演出とそうでない演出に対する氏の見方について質問があったが、古典や現代などという区別は時流や演出の変化などを見ないと判断はできないとのことであり、今後への課題となった。また、いわば逆輸入ともいえるこの歴史学の手法に依拠することが、どのような有効性をもたらすのか、今後の報告に期待したい。

澤田篤子

邦人音楽作品における「南アジアもの」―合唱と即興―

小日向英俊

日本における南アジア音楽の受容に関する継続的な研究を背景に、南アジアを題材とした伊藤完夫、柴田南雄、千原英喜、高嶋みどりら邦人作曲家とその合唱作品、および即興性を摂取した小杉武久率いるタージマハール旅行団を取り上げ論じた発表だが、焦点は前者に当てられた。その昔、中国というフィルターを通して南アジアより偉大な文化を受容した日本人だが、現代の音楽家が直接南インドから何をどのように摂取しようとしたのか、興味深いテーマであった。器楽作品と異なり、受容されたのは、翻訳を通した文学面、思考・思想面が中心であり、伊藤や柴田の作品で音楽構造あるいは上演形式面の相対化があると結ばれ、古に中国人がインドの梵唄を「金言有訳梵響無授」（梁高僧伝）として受容した経緯が想起された。アマチュアやコンクールを通した南アジア題材の広がりという知見も得られ、興味深い内容であった。

発表後、日本人作曲家におけるオリエンタリズムの意識の有無、柴田作品への小泉文夫の影響、伊藤以前の南アジアを題材とする作品の有無などについて質疑応答があった。

澤田篤子

木下保が目指した日本語歌唱法

―《沙羅》（信時潔作曲）に関する資料の考察から―

仲辻真帆

仲辻氏の発表は、歌曲《沙羅》を例に昭和期に活動した声楽家、木下保が目指した日本語の歌唱法を明らかにする試みである。

まず、信時潔による作品集《沙羅》の構成についての作曲者の主張、及び木下保の解釈が示された。両者の見解には関連があり、作曲者だけではなく、歌い手の見解を検討する必要性が示された。

次に、《沙羅》からみた木下の日本語歌唱法が提示された。とりわけ木下が「大和言葉」と呼ぶ古語の発音に関して、母音・子音の扱いに留意し、日本の古典的な劇場音楽である浄瑠璃の語りから示唆を受けていたことが、音源とともに示された。作曲家からの要求に答えようとすることが声楽家独自の探求へとつながっており、さらにそれが作曲家へのフィードバックとなる相互作用が生じていることが指摘された。

日本語歌唱法についての作曲家の側からの研究は多いが、声楽家自身が歌唱法を練り上げる必要があることは、日本独自の特色として、より深めていただきたいテーマであると感じた。

丹羽幸江

新作能の創作過程と「演劇化」

―シアター能楽の英語能＜パゴダ＞を事例として―

安納真理子

安納氏の発表は、英語能＜パゴダ＞のフィールドワークに基づき、回を重ねる上演の過程を追うことで、新作能が持つ特質を浮かび上がらせる試みであった。新作能においては、古典能において一回の申合セのみで上演されるような即興性は排除される。リハーサルを経て上演に至る過程、および、上演の度ごとにリファインされる過程は一般の演劇に近いものであるとし、それを新作能の「演劇化」という概念により説明する。

＜パゴダ＞は 2009 年の初演から 2011 年のアジア・ツアーまで三回の上演がなされた。作家、作曲家、演者、演出家の四者により、創作から舞台制作、そして再演時に向け、試行錯誤を経ながら作品が作り替えられた。新作能の創造性は、上演そのものの即興性よりも、作り替えの準備段階に発揮され、これが能の「演劇化」と呼びうるとする。

英語能のこうした「演劇化」は、現在の演能へと至る以前の、世阿弥の時代など初期の能の形を推測にもつながるとする、能を広く演劇の観点から考察する発表であった。

丹羽幸江

◇研究発表３-B

〔パネルディスカッション〕

東南アジアのゴング文化研究への視角

パネリスト代表：福岡正太

パネリスト：井上航、杉山昌子、福岡まどか、
梅田英春、柳沢英輔（非会員）

本パネルディスカッションは 11 月 10 日 13：00～14：00 に 378 教室で行われた。出席パネリストは、福岡正太（代表）、井上航、杉山昌子、福岡まどか、梅田英春、柳沢英輔（非会員）。

まず福岡正太氏により「東南アジアのゴング文化研究」プロジェクトの概略について説明があり、現時点における成果と今後東南アジア全体を包括する総合的ゴング文化研究への展望が述べられた。また A. Seeger を引用し「音楽パフォーマンスを通じた社会構築」への提唱がなされた。

続いて井上氏よりカンボジア北東部ラタナキリ州クルン人のゴング文化について報告がなされた。クルン社会は焼畑農耕社会でありゴング音楽を伴う水牛供犠について紹介があった。

柳沢氏はヴェトナム中部高原のジャライ人社会のゴング文化において、特にゴング調律職人の活動に注目し、楽器流通、儀礼継承におけるその役割の重要性を述べた。

福岡まどか氏は中部ジャワのジョグジャカルタ市で近年注目される鉄製のゴングについて紹介した。それによれば鉄製ゴングは、青銅製ゴングの代用としてではなく独自の需要と積極的目的・用途を獲得し流通しているという報告がなされた。

杉山氏はバリ島で使用されるゴングが今日全て中部ジャワのスラカルタ市で製造されていることを指摘し、その流通の過程で台頭してきた楽器商の役割に注目する報告を述べた。

最後に梅田氏は物流品としてのゴングに注目し、インドネシア、ロンボク島の事例を報告した。また調律師がゴング文化の鍵を握るという考えを示し、過去から現代に至るゴング調律の傾向とその社会的要因、楽器としての神聖性と物質性の変化についての議論を喚起した。

質疑応答でフロアから、今後のゴング文化研究について、東南アジア地域に限定せず、東アジアを含む全アジア的研究への発展の要望が出された。　皆川厚一

◇研究発表３−Ｃ（司会：植村幸生）

三木楽器のピアノの販売にみる関西圏の個人消費について

齊藤紀子

ピアノは西洋音楽を代表する楽器であると同時に、据え付けて使用されるという性質を持つ。このため、ピアノの分布は西洋音楽の浸透を考える一つの指標とされるが、公的機関はともかく、過去のピアノの個人所有の状況を明らかにすることは容易でない。

本研究は洋楽受容史研究において初出となる三木楽器（大阪市）のピアノ納入簿を用いてこの課題に取り組む試みである。まず１．個人向け直販の割合を示し（全体の３割）、次いで、２．詳細な納品先がわかるデータに注目して、阪神地域におけるピアノ購入者のプロフィールを明らかにし、最後にこれを手がかりに、３．マッピングされた納入先と当時開発されつつあった関西私鉄沿線の郊外住宅地との関連が示された。

質疑応答で議論されたように、ピアノの購入者が必ずしも使用者ではないということに留意する必要があるが、納入簿は類を見ない資料であり、まだまだ多くの成果を引き出すことができるのではないだろうか。今後の研究の進展に期待したい。　上野正章

我が国における音楽博物館の濫觴と展開

井上裕太

演奏されるや否や消え失せてしまう音楽に博物館はそぐわないように見えるが、楽器に注目し、あるいは音楽芸術作品のコンテクストに注目するならば、音楽博物館の展示の方向が見えてくる。本発表は昭和 10 年代を中心に日本における音楽博物館建設運動の勃興と展開を文献資料から明らかにする試みである。濫觴として上野高等女学校における音楽資料展覧会が紹介された後、田辺尚雄、黒沢隆朝、太田太郎の言葉から、音楽博物館建設運動についてのコンセプトが描き出されていった。また、戦後の田辺の活動が紹介された。

質疑応答では上野高等女学校が会場に選ばれた理由が問われたが、確かに地理的な要因が大きいように思われる。なお、今回の発表は、広く音楽博物館建設運動の概略を伝えるものであったが、個々の論点に注目してじっくり議論を尽くすならば、また違った側面が見えてくるのではないだろうか。

上野正章

植民地朝鮮における日本人音楽家による音楽会の実態

金志善

植民地朝鮮では 1920 年以降、日本人演奏家による演奏会活動が頻繁に行われるようになった。本発表は、日本人演奏家による演奏会の実態を明らかにし、植民地朝鮮における西洋音楽界においてこれがどのような意義を持っていたのかということを考察する試みである。まず、『毎日申報』の調査によって日本人演奏家による演奏会の概要が示され、次いで、クラシック音楽の享受層が富裕な知識層、とりわけ学生であったことが指摘され、最後に当時の文献資料から演奏会に対する朝鮮人の反響が紹介された。

質疑応答では新聞読者や鑑賞教育が問題になった。また、音楽文化の地域格差に関するコメントもあった。比較研究から見えてくるものもあるだろう。なお、かなり盛り沢山な発表であったが、配布資料が工夫されていたので、内容を把握

して時代を一望することができた。　上野正章

◇研究発表４-A

〔パネルディスカッション〕

1930 ～ 40 年代の東京音楽学校

パネリスト代表：酒井健太郎

パネリスト：橋本久美子、上田誠二（非会員）

本発表は、乗杉嘉壽が校長を務めた 1930～40 年代の東京音楽学校に焦点をあてた、洋楽文化史研究会に所属する３名の報告からなるパネルディスカッションであった。

まず、上田誠二氏より「社会的な役割の考察　音楽で社会を変えようとした校長・乗杉嘉壽の時代」と題する報告があった。上田氏は、「明治後期～大正前期の通俗教育と邦楽」「大正後期の社会教育と邦楽レコード」「昭和初期の芸術教育と合唱・吹奏楽」という切り口から、当該期の教育から見える秩序意識を提示した。

続く、酒井健太郎氏の「東京音楽学校と邦楽　1936（昭和 11）年の邦楽科開設を中心に」では、当該期に設置された邦楽科に焦点をあて、乗杉校長や学校外からの邦楽に対する意見が紹介された。邦楽を国粋と捉える時代背景、邦楽の教授方法や調査研究の捉え方は、伝承よりも研究・保存が主張され、戦後の東京芸術大学邦楽科論争に生きてくることが指摘された。

最後に、橋本久美子氏から「乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校にみる社会教育論的学校運営」と題した報告がなされた。橋本氏は、『東京芸術大学百年史』の編集時より収集してきた乗杉に関する史料から、乗杉の功績をまとめた。東京音楽学校の校長に着任してからの乗杉は、学校教育を社会教育の一部と捉え、国楽創成、人材育成、普及活動に尽力した人物であったことを示した。

以上の発表を踏まえ、乗杉嘉壽という批判が多かった人物は、戦後に認識が変わったことを示し、異なる角度から人物を見ることの重要性が示唆された。また、フロアからは橋本氏に対して、「乗杉の理念や活動に対する当時の教員や生徒の反応」「朝鮮での東京音楽学校の演奏会へ同行した際、乗杉に対する朝鮮の人々の反応」はいかなるものであったかという質問が投げかけられた。今回のパネルディスカッションにおいては、戦時中の制度が紐解かれたことで、今日において音楽の社会的効用を考える手掛かりとなったのではないだろうか。　丸山彩

◇研究発表４-B（司会：濱崎友絵）

サフィー・アッディーンの音楽理論書におけるアラブの音程論の検討

木村伸子

13 世紀のバグダードの音楽家、サフィー・アッディーンの著した『リサーラ・アル=シャラフィーヤ（音組織の比に関するシャラフィーヤの書）』のアラブの旋法理論に関する記述の一部を、バルケシュリによる理論との比較もまじえて、再整理したもの。本書はアラブ音楽史上、最重要な論考の一つとされ中東各地の音楽理論に多大な影響を与えながらも、彼の提示した「協和音程」の概念は他地域の音楽の概念とは異なるので再整理が必要なのだという。検討の結果、この理論は、ウードをはじめとするアラブの弦楽器演奏に適したものであると結論づけられた。フロアからは、実践的音楽伝統と書かれた音楽理論との間のずれや地方差は認識されているのかという質問が出た。それに対し、地域差、時代差、楽器によるさまざまなヴァリエーションがあるということは当然認識されているが、こういった理論構築の努力は、それらを生み出すことになった共通基盤としての理論を模索する動きの表れであると説明された。発表者はウードの演奏者でもあるという。願わくば、楽器や具体的実践と共に発表が聞きたかった。　田中多佳子

シリア正教徒共同体における世俗音楽文化形成：

宗派からネイションへ？

飯野りさ

独特の聖歌群で知られるシリア正教会の信徒たちは、トルコ東南部の一地方の教会を中心とする共同体を生活基盤としてきたが、今日では半数以上が中東以外に住む。だが、1990 年代以降、インターネット等、国の枠組みを越えたメディアの発達が、各ディアスポラ間の交流を促進し、宗教集団としてのアイデンティティが、ある種の民族的集団としてのそれへと認識転換されつつあるという。本研究はそれを音楽学的側面から裏付けようとしたもので、今日、スウェーデンやドイツなどの移民が、教会外で活発化させている世俗音楽の諸活動が紹介された。

聞き手側の基礎知識の不足に対する配慮からだろうが、音楽以外の概説に多くの時間が費やされ、肝心の世俗音楽活動の分析やそういった現象をめぐる議論が未消化になってしまったことが惜しまれる。しかしながら、特に音楽に関する情報が限定され、調査に大きな困難が予想される研究対象の、動態としての音楽文化の一端が明らかにされたことは意義深く、この貴重な研究のさらなる展開を待ちたい。

田中多佳子

古代ジャワ奏楽図浮彫が示唆するインターロッキング文化圏

由比邦子

由比邦子氏の発表は、古代ジャワの宗教建造物遺跡にみられる壁面浮彫の奏楽図を読み解くことで、インド化以前の東南アジア・オーストロネシア語族分布域にゴング・チャイム

文化圏をも包括するインターロッキング文化圏があるという仮説を提唱するものであった。由比氏は、遺跡の舞踊図浮彫の中で、踊り手にではなく、ポーズの異なる複数人の小型シンバル奏者がアニメーションのような手法で描かれていることに注目し、これを「インターロッキングによる旋律奏」であると解釈した。本発表で例示された浮彫は、8 世紀末から 9 世紀半ばに建立された中部ジャワの寺院 Candi Borobudur, Candi Prambanan のものに限られた。壮大なテーマであるだけに、現時点で由比説の真偽を判断するのは時期尚早であろう。質疑では当該地域の研究者たちから小型シンバルで旋律を演奏できたかどうか、可能性を問う質問があった。

山下正美

タイ人作曲家プラシッド・シラパバンレン（1912-1999）の活動について

山下暁子

山下暁子氏の発表は、先行研究において「西洋音楽の先駆者」として語られてきたタイ人作曲家プラシッド・シラパバンレン（1912-1999）が、東京音楽学校で西洋音楽を学ぶ以前には、タイ音楽家としての立場が確立していたことを、その活動拠点であった PIDM (Phakavali Institute of Dance and Music)に関する現地調査を通して明らかにするものであった。シラパバンレンはタイ音楽の巨匠ルアン・プラディット・パイロを父に持つ音楽家一族の生まれで、PIDM は父の劇団を引き継ぐかたちで、プラシッドが舞踊家の妻や姉と共に立ち上げた。現在ではルアン・プラディット・パイロ財団として親族が要職を務め、タイ音楽・舞踊の教授やパフォーマンスの拠点として継承されている。フロアからは、PIDM での活動に西洋音楽を学んだ影響が見られるか、シラパバンレンが編曲した父の作品について質問が寄せられた。

山下正美

ICTM（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ

1．ICTM と東洋音楽学会の連携の経緯

現在、東洋音楽学会は ICTM の日本国内委員会として機能しています。筆者は 2006 年より ICTM 担当委員を務めてきましたが、東洋音楽学会と ICTM の連携の経緯についてはしっかりと把握していませんでした。当学会が 2012 年度より社団法人から一般社団法人に移行したことに伴い、現在学会の内規を見直す作業を理事会内で進めています。そこで ICTM 国内委員会についても、その経緯を把握し、国内委員長や担当委員の位置づけや役割について、あらためて見直すこととなりました。その準備段階として、小塩さとみ総務理事と筆者が、過去の会報や機関誌の記録から把握した「ICTM 国内委員会の歴史」を、この紙面をもってご報告したいと思います。

1）ICTM 広島大会の準備期間 1991（平 3）～1999（平 11）
東洋音楽学会は ICTM 世界大会を広島で行うにあたり、その準備委員会としての ICTM 担当委員会を 1991 年（平 3）に設置しました。
委員は五名、委員長は柘植元一氏。

2）柘植会長時代　2000（平 12）～2001（平 13）
広島大会を機に東洋音楽学会は、ICTM 国内委員会という位置づけとなり、柘植会長時代には、柘植氏が ICTM 国内委員会の委員長を兼務しました。

3）塚田健一担当委員時代　2002（平 14）～2005（平 17）
2002 年（平 14）に当学会内で「ICTM 内規」が作成され、「ICTM 関係の様々な業務を行う ICTM 担当委員」が初めて設置されました。初代委員として塚田健一氏が委嘱され、また当時会長の谷本一之氏が国内委員会委員長に就任しました。2004 年（平 16）に塚田氏は東洋音楽学会会長となり、2005 年（平 17）まで ICTM 国内委員長と担当委員を兼務。

2006 年（平 18）に東洋音楽学会会長に故月渓恒子氏が就任されたのを機に、筆者が ICTM 担当委員を委嘱され、以来現在に至っています。本学会は、このように 1999 年の広島大会以来、ICTM との連携を保ち国際的な学術研究の交流に貢献しています。当学会員の中には、ICTM 会員ではない方も多くおられますが、当学会の ICTM を通じての国際貢献の役割をご理解いただき、国内委員会としての活動や情報共有にご協力いただければ幸いです。

2．第 43 回 ICTM 世界大会のお知らせ

場所：カザフ国立芸術大学（カザフスタン、アスタナ）
日程：2015 年 7 月 16 日（木）～22 日（水）
発表応募締切：2014 年 9 月 7 日
発表可否の通知：2014 年 12 月（予定）

発表の応募要領は、ICTM の会報（Bulletin of the ICTM、以下リンク）でご覧になれます。
http://www.ictmusic.org/publications/bulletin-ictm

大会テーマ

1. Music and new political geographies in the Turkic speaking world and beyond
2. The creators of music and dance
3. Music, dance, the body, and society
4. Sound environments: From natural and urban spaces to personal listening

5. Visual representation of music culture
6. New Research

プログラム委員長は、現在ケンブリッジ大学の中央アジア音楽センターでディレクターを務める Razia SULTANOVA 氏です。ICTM の世界大会が中央アジアで開催されるのは初めてとのことです。多くの会員のみなさまの参加を期待しています。

３．第４回 ICTM 東アジア音楽研究会シンポジウム、日本開催のお知らせ

場所：奈良教育大学
日程：2014 年８月 21 日（木）～23 日（土）
大会実行委員長：寺内直子・劉 麟玉
プログラム委員長：マット・ギラン

テーマ
1. East Asian musics from a cross-cultural perspective
2. Music in digital culture/mass media
3. Music and ritual
4. Restoration and reconstruction of musical traditions
5. Music and gender
6. New research

発表募集は既に締め切られましたが、参加は ICTM 非会員でも可能です。当シンポジウムの詳細については、ICTM の会報（http://www.ictmusic.org/publications/bulletin-ictm）、またはシンポジウム・ウェブサイト（https://sites.google.com/site/meanara2014/）をご覧ください。

４．第８回 ICTM 音楽とマイノリティー研究会シンポジウム、日本開催のお知らせ

場所：国立民族学博物館
日程：2014 年７月 18 日（金）～24 日（木）
大会実行委員長：寺田吉孝
プログラム委員長：Ursula Hemetek

テーマ
1. Cultural policy and minorities
2. Tourism and minorities
3. Gender and sexual minorities
4. New research

発表募集は既に締め切られましたが、参加は ICTM 非会員でも可能です。当シンポジウムの詳細については、ICTM の会報（http://www.ictmusic.org/publications/bulletin-ictm）をご覧になるか、シンポジウム連絡先（ictm2014@idc.minapku.ac.jp）へお問い合わせください。

＊その他、日本以外でも様々な ICTM 研究会の開催が予定されています。詳細は、ICTM の会報（http://www.ictmusic.org/publications/bulletin-ictm）をご覧ください。

５．ICTM 担当委員からのお願いとお知らせ

１）一斉メールについて

東洋音楽学会員の中の ICTM 会員に対して、担当委員（早稲田みな子：minako.waseda@gmail.com）より不定期に ICTM に関連するお知らせを一斉送信しています。現在までに一斉メールを受信されていない方、また現在 ICTM 会員でない方で、今後 ICTM に関するメール連絡を希望される場合は、担当委員までお知らせください。

２）ICTM の入会申し込みについて

ICTM の世界大会や各研究会（Study Group）のシンポジウムで研究発表を行うには、ICTM 会員であることが条件になります。入会を希望される方は、下記ウェブサイトより入会申し込みができます。会費（年間 60 ユーロ）の納入には PayPal が利用できます。ご不明な点がありましたら、担当委員までご連絡ください。
http://www.ictmusic.org/membership/new

会員の受賞

◇山勢松韻氏が文化功労者に

本学会会員で日本芸術院会員の山勢松韻（本名木原司都子）氏が、2013 年度の文化功労者に決定しました。顕彰式は 11 月５日に東京・虎ノ門のホテルオークラで行なわれました。

◇川﨑瑞穂氏が遠野文化奨励賞受賞

本学会会員で国立音楽大学大学院生の川﨑瑞穂氏が平成25年度遠野文化奨励賞を受賞されました。選考対象となった論文は「大出早池峰神楽源流考 ―関東地方の神楽囃子「テケテットン」との関係から―」です。表彰式は、11月３日（日）に遠野市のあえりあ遠野交流ホールで行なわれました。

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2013 年９月 22 日（日）にお茶の水女子大学において一般

社団法人東洋音楽学会の第３回通常理事会が、2013 年 11 月９日（土）に静岡文化芸術大学において第２回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細については、後掲の第２回定時社員総会議事録（抄）ならびに添付資料をご参照ください。

１）新入会員について

理事会において、2013 年４月以降に仮承認された正会員 12 名、学生会員１名が、会員として正式に承認されました。

２）参事委嘱の推薦について

東日本支部参事として仲辻真帆氏を推薦することが承認されました。任期は、本理事会が解散する 2014 年の総会までとなります。

会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせなど

１．会費納入のお願い

2013 年９月から新しい年度が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払い込みくださいますよう、お願い申し上げます。振り込み用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振込みください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：　8000 円
学生会員（大学院生を除く）、および割引申請者：6000 円

〇郵便局からの払込
ゆうちょ銀行　［口座番号］　00160-6-55723　［加入者名］一般社団法人東洋音楽学会

〇他金融機関からの振込
ゆうちょ銀行　［支店名］　〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）
［当座］　0055723

２．会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ（http://tog.a.la9.jp/about.html#7）でご確認の上、お申し込みください。

３．会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利（研究会・大会での発表、学会の発行物の受取）が行使できないことがありますのでご注意ください。

４．卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

第 31 回田邉尚雄賞アンケートのお願い

第 31 回田邉尚雄賞選考委員会では、同賞の選考にあたり、推薦情報を募集しています。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、皆さまからの積極的なアンケート送付をお願いいたします。自薦他薦は問いません。

選考対象：2013（平成 25）年１月１日～12 月 31 日の発行物。
アンケート締切：2014（平成 26）年２月６日正午
記入事項：著者名、発行年月日、発行所名。なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数も記してください。
送り先：東洋音楽学会第 31 回田邉尚雄賞選考委員会
（郵送）〒110-0005　東京都台東区上野３－６－３三春ビル 307 号
（FAX）03-3832-5152
（E-mail）LEN03210@nifty.com
選考委員：金城厚、酒井正子、野川美穂子、福岡まどか、横井雅子

東日本支部からのお知らせ

◇定例研究会発表募集（７月例会）

2014 年７月５日（土）に開催される東日本支部定例研究会での研究発表を募集しています。
発表を希望される方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800 字以内）、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、Fax、E-mail）を明記の上、４月 20 日までに、東日本支部事務局あて、お申し込みください。
なお、発表希望をご提出後１週間経過しても事務局からの連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

◇「会員の声」投稿募集

東日本支部発行『東日本支部だより』には、会員の皆様からの情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あて、お知らせください。投稿方法などの詳細は、『東日本支部だより』の最終ページをご覧ください。

〔東日本支部事務局〕
〒110-0005　台東区上野　３－６－３　三春ビル 307 号

東洋音楽学会東日本支部事務局
E-mail：tog.higashi@gmail.com

国際シンポジウムのお知らせ

上野学園大学日本音楽史研究所の創設 40 周年記念として、以下の国際シンポジウムが開催されます。

岸辺成雄博士記念　東洋音楽史研究国際シンポジウム
唐代音楽の研究と再現

主催：上野学園大学日本音楽史研究所
協賛：上海音楽学院・法政大学・二松學舍大學
演奏協力：伶楽舎

日時：上野学園大学：2014 年３月６日（木）・７日（金）
（入場無料：資料代 1000 円要）〔事前申込制〕
６日：公開講演（石橋メモリアルホール）13：00～
７日：研究発表（上野学園大学 1403 号教室）９:00～
ﾚｸﾁｬｰｺﾝｻｰﾄ（石橋メモリアルホール）17:00～

【お申し込み・お問い合わせ】
上野学園大学日本音楽史研究所
E-mail：nok@uenogakuen.ac.jp　電話 048-942-8600

詳細は下記にてご参照ください。
http://www.ishibashimemorial.com/calendar/201403/000870.html

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加
（2013 年８月～11 月、訂正箇所は下線部）

会員異動は、個人情報保護のため削除しました。

◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

（2013年８月～11月、到着順）

『東方學會報』No. 102　(財) 東方学会
『楽道』８,９,10,11月号　正派邦楽会
『阪大音楽学報』第10号　大阪大学音楽学研究室
『A Dictionary of Traditional Japanese Musical Instruments
— From Prehistory to the Edo Period』
郡司すみ編　Henry Johnson訳　エイデル研究所
『雅楽だより』第31号　雅楽協議会
『近代日本における音楽・芸能の再検討Ⅱ』
（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告８）
後藤静夫編 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
『日本音楽学会会報』第86号
『音楽学』第58巻１号　日本音楽学会
『アイヌ語地名を歩く―山田秀三の地名研究から
―2012・夏　斜里／知床』（企画展図録）
『北海道立アイヌ民族文化研究センター年報2011』
『アイヌ民族文化研究センターだより』No. 37
北海道立アイヌ民族文化研究センター

新刊書籍

『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか？
――人種・ジェンダー・文化資本』
吉原真里、アルテスパブリッシング、2,625 円
『アビイ・ロード・スタジオ――世界一のスタジオ、音楽革命の聖地』
アリステア・ローレンス、ジョージ・マーティン、山川真理他訳、
川原伸司他監修、河出書房新社、9,975 円
『祈りの民俗誌』
佐藤健一郎、田村善次郎、八坂書房、2,100 円
『石見神楽――舞を伝える舞と生きる』
島根県立古代出雲歴史博物館、1,200 円
『歌声すぎゆき――心に残る昭和の名曲』
平田超人、展望社、1,680 円
『雲南省ハニ族の生活誌――移住の歴史と自然・民族・共生』
須藤護、ミネルヴァ書房、4,725 円
『からだで作る“芸”の思想――武術と能の対話』
前田英樹、安田登、大修館書店、1,890 円
『歌舞伎座五代 木挽町風雲録』
石山俊彦、岩波書店、2,100 円

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。（機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail 等でも結構です）

◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。（複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等）

『歌舞伎座さよなら公演』（小学館 DVD ブック）（全８巻）
小学館、210,000 円
『歌舞伎のいき』（小学館 DVD ブック）（全４巻）、
小学館、15,960 円
『歌舞伎をめぐる環境考』　林公子、晃洋書房、3,360 円
『勘三郎伝説』　関容子、文藝春秋、1,680 円
『宮廷御神楽芸能史』（新典社研究叢書）
中本真人、新典社、12,810 円
『北のはやり歌』　赤坂憲雄、筑摩書房、1,575 円
『義太夫年表　昭和篇』（第二巻）
国立文楽劇場義太夫年表昭和篇刊行委員会編、
和泉書院、18,900 円
『郷土芸能「唐人おどり」伝承の秘訣（三重県無形民俗文化財指定鈴鹿市指定無形文化財第九号）』
和田佐喜男、伊勢新聞社、2,000 円
『玉葉精読』　高橋秀樹、和泉書院、10,500 円
『近代日本芸能年表＜ 上＞（舞台芸能 1853-1952 年、映画 1896-1952 年）』
倉田喜弘、林淑姫、ゆまに書房、18,900 円
『近代日本芸能年表＜下＞（レコード 1909-1952 年、ラジオ 1922-1952 年、物故者 1853-1952 年、資料、索引）』
倉田喜弘、林淑姫、ゆまに書房、18,900 円
『幻影の「昭和芸能」――舞台と映画の競演』
藤井康生、森話社、3,780 円
『紅白歌合戦と日本人』　太田省一、筑摩書房、1,785 円
『幸若歌謡の研究』（新典社研究叢書）
柴田幸子、新典社、15,750 円
『ゴースト・ミュージシャン――ソウル黄金時代、アメリカ南部の真実』　鈴木啓志、DU BOOKS、2,940 円
『御即位大嘗祭大典図案』　下村玉広、芸艸堂、36,698 円
『サウンドとメディアの文化資源学』
渡辺裕、春秋社、4,410 円
『ザ・タイガース――世界はボクらを待っていた』
磯前順一、集英社新書、819 円
『ジャズ昭和史――時代と音楽の文化史』
油井正一、行方均、DU BOOKS、3,990 円
『JAZZ 100 の扉――チャーリー・パーカーから大友良英まで』（いりぐちアルテス４）
村井康司、アルテスパブリッシング、1,680 円
『ジャパニーズ・メタル――ラウドネス、アースシェイカーをはじめとする 80 年代』（Shinko Music mook）
ザ・ディグ編集部、
シンコーミュージック・エンタテイメント、1,680 円
『十八代目中村勘三郎全軌跡』
中川右介編著、朝日新聞出版、1,890 円
『授業のための日本の音楽・世界の音楽　世界の音楽編（音楽指導ブック）』
島崎篤子、加藤富美子、音楽之友社、2,520 円
『写真集　昭和の肖像＜町＞』
小沢昭一、筑摩書房、2,940 円
『図録　日本の民俗芸能』
本田安次、日本図書センター、25,200 円
『世阿弥――日本人のこころの言葉』
西野春雄、伊海孝充、創元社、1,260 円
『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術』
橋爪節也、加藤瑞穂編著、大阪大学出版会、2,520 円
『中央アメリカ音楽の旅「ある恋の物語」』
早川智三、知玄舎、2,835 円
『中世歌謡評釈　閑吟集開花』
真鍋昌弘、和泉書院、15,750 円
『調性音楽のシェンカー分析』
アレン・キャドウォーラダー、デイヴィッド・ガニェ、角倉一朗訳、
音楽之友社、9,975 円
『七世竹本住大夫――限りなき藝の道』
高遠弘美、講談社、1,575 円
『能はこんなに面白い！』
観世清和、内田樹、小学館、1,890 円
『能を読む４　信光と世阿弥以後』
梅原猛、観世清和監修、角川学芸出版、6,825 円
『光さんの贈りもの――林光、ピアノを弾きながらの講演と未完自叙伝　ＣＤ付』
林光、大原哲夫、大原哲夫編集室、3,675 円
『東アジア流行歌アワー』
貴志俊彦、岩波現代全書、2,415 円
『藤圭子』　河出書房新社編、河出書房新社、1,260 円
『仏教と雅楽』　小野功龍、法蔵館、3,675 円
『ブリティッシュ・ロックの真実』
中山康樹、河出書房新社、1,680 円
『平成関西能楽情報』（上方文庫）
権藤芳一、和泉書院、3,990 円
『邦楽入門』（１冊でわかるポケット教養シリーズ）
西川浩平、ヤマハミュージックメディア、997 円
『ボブ・ディラン ロックの精霊』
湯浅学、岩波新書、798 円
『まちかどの芸能史』　村上紀夫、解放出版社、2,625 円
『宮沢賢治没後 80 年記念企画　宮沢賢治の聴いたクラシック』（ＣＤ２枚付）　萩谷由喜子他、小学館、3,150 円

『民謡の発見と〈ドイツ〉の変貌――十八世紀＜音楽の国ドイツ＞の系譜学』　吉田寛、青弓社、2,730 円

『民俗芸能探訪ガイドブック』
星野紘、全日本郷土芸能協会他編、国書刊行会、2,310 円
『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』
大島幹雄、祥伝社、1,680 円
『メモリースケープ ――「あの頃」を呼び起こす音楽』
小泉恭子、みすず書房、3,150 円
『横道萬里雄の能楽講義ノート＜謡編＞』(ひのき能楽ライブラリー)
横道万里雄、「横道萬里雄の能楽講義ノート」出版委員会、
桧書店、3,465 円
『義経千本桜（上方文化講座）』
大阪市立大学文学研究科「上方文化講座」企画委員会編、
和泉書院、2,100 円
『リッカルド･ムーティ自伝――はじめに音楽それから言葉』
リッカルド・ムーティ、田口道子訳、音楽之友社、2,625 円
『冷泉家　八〇〇年の「守る力」』
冷泉貴実子、集英社新書、735 円
『レヴィ＝ストロースと音楽』（叢書ビブリオムジカ）
ジャン＝ジャック・ナティエ、添田里子訳、
アルテスパブリッシング、2,625 円
『浪曲論』　稲田和浩、彩流社、2,100 円

新発売視聴覚資料（ゴシック体の項目は賛助会員の刊行物）

●CD
『ヴァイオリン演歌』　MHCL-2327/8、4,410 円
『おわら風の盆～名盤編～』　COCJ-38250、1,600 円
『おわら風の盆～実演盤編～』　COCJ-38249、1,600 円
『虚無僧尺八の世界――江戸の尺八　琴古流　鹿の遠音』
VZCG-784、3,150 円
『《コロンビア、エクアドル、ブラジル》南米の黒人音楽
――神々への讃歌』　WPCS-16092、945 円
『卅三間堂棟由来――豊竹呂勢大夫　第十七回日本伝統文化振興財団賞受賞記念』　VZCG-781、3,000 円
『静鈴恋慕』　VZCG-780、2,999 円
『「弾」――鶴澤清治の世界』　COCJ-38208、2,500 円
『「奏」――鶴澤清治の世界』　COCJ-38207、2,500 円
『DAI-DO-GEI』　MHCL-2325、3,150 円
『平成 26 年度　日本民謡特撰集』　TECY-23244、2,299 円
『日本の祭り　祇園囃子～長刀鉾～』　KICH-269、2,000 円
『日本の祭り　神田囃子』　KICH-272、2,000 円
『日本の祭りベスト』　KICH-268、2,000 円
『日本の祭り　おわら風の盆』　KICH-271、2,000 円
『古謝美佐子／日本の民謡　沖縄編』　KICH-266、2,000 円
『日本の祭り　郡上踊り』　KICH-275、2,000 円
『日本の祭り　阿波踊りライヴ』　KICH-274、2,000 円
『日本の祭り　祇園祭ライヴ～鶏鉾～』
KICH-270、2,000 円
『《日本》尺八の世界』　WPCS-16095、945 円
『《バハマ》ザ・リアル・バハマ 1――バハマ音楽の真髄Ⅰ』
WPCS-16093、945 円
『《バハマ》ザ・リアル・バハマ 2――バハマ音楽の真髄Ⅱ』
WPCS-16094、945 円
『唯是震一作品集』　VZCG-773、2,999 円
『《ユーゴスラヴィア》ユーゴスラヴィアのヴィレッジ・ミュージック――ボスニア＝ヘルウェゴヴィナ、クロアチア、マケドニアの歌と踊り』　WPCS-16091、945 円

●DVD
『第十七回日本伝統文化振興財団賞　豊竹呂勢大夫（人形浄瑠璃文楽　太夫）』　VZBG-46、3,500 円

●カセット
『淡海節／大島節』　VZSG-10620、1,200 円
『浜田節／秋田米とぎ唄』　VZSG-10619、1,200 円
『キンキラキン／関の鯛釣り唄』　VZSG-10618、1,200 円

編集後記

会報 90 号をお届けいたします。今号は第 64 回大会の大会報告を中心にまとめました。実行委員会企画ならびに会員の研究発表、共同企画が大変充実していた大会であり、多数の会員の方々に大会レポートをお願いいたしました。素晴らしいレポートをお寄せいただきましたこと、ご協力に深く感謝いたします。

なお、編集委員会内部のことではありますが、今号についても、大会レポートの会員への依頼、編集実務、図書・資料等の受贈、新刊書籍、新発売視聴覚資料等は、すべて、若手の参事さんの編集委員の方々が担当してくださいました。これは、本学会が誇りとすべきことだと思っています。会員のみなさまが本号を十分に活用していただけることを祈っております。（加藤富美子）

会報編集委員会
理事：加藤富美子、塚原康子
参事：大久保真利子、荻野珠、角優希、橋本かおる、
松本民菜、山口かおり

第２回定時社員総会（抄）・添付書類

１．日時：平成 25 年 11 月９日（土）16:25～17:25

２．場所：静岡文化芸術大学　講堂

３．出席者：333 名（委任状の提出者 81 名と書面出席 195 名を含む）

〔備考〕正会員 628 名、定足数 314 名

４．議事事項と審議の経過及び結果

定款第 19 条により薦田治子会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第 16 条により副議長を要請し、皆川厚一、小日向英俊両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

第１号議案　平成 24（2012）年度事業報告の件

小塩さとみ理事（総務担当）より「平成 24（2012）年度事業報告」【添付書類１】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第２号議案　平成 24（2012）年度の収支決算の件

早稲田みな子理事（経理担当）が「平成 24（2012）年度収支計算書内訳表」【添付書類２】について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第３号議案　平成 25（2013）年８月 31 日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

早稲田みな子理事（経理担当）が「平成 25（2013）年８月 31 日現在貸借対照表および平成 24（2012）年度正味財産増減計算書」【添付書類３】について説明を行った。また、徳丸吉彦監事が「監査報告」【添付書類７】について説明した。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第４号議案　平成 25（2013）年８月 31 日現在会員異動状況の件

小塩さとみ理事（総務担当）が「平成 25（2013）年８月 31 日現在会員異動状況」【添付書類４】について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第５号議案　その他

議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

その後、小塩さとみ理事（総務担当）が「平成 25（2013）年度事業計画」【添付書類５】について、次いで早稲田みな子理事（経理担当）が「平成 25 年（2013）年度収支予算書」【添付書類６】についてそれぞれ報告を行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

以下、添付資料

【添付資料１】役員選出資料

平成 24 年度（2012 年度）事業報告

（自平成 24 年（2012 年）９月１日　至平成 25 年（2013 年）８月 31 日）

１．事業の状況

〔１〕研究発表会および学術講演会の開催（定款第５条１）

（１）公開講演会の実施（定款施行細則第３条１）

・日時　2012 年 11 月 10 日

・会場　国立音楽大学

・課題１「国立音楽大学附属図書館所蔵竹内道敬文庫―コレクションの成立まで―」

課題２「雅楽の現在」

課題３「雅楽演奏」

（２）研究発表大会の実施（定款施行細則第３条２）

・日時　2012 年 11 月 11 日

・会場　国立音楽大学

・発表件数 18 件

（共同発表、パネルディスカッション、レクチャー・パフォーマンスを含む）

（３）次年度大会の準備

・日時　2013 年 11 月９日、10 日

・会場　静岡文化芸術大学

（４）定例研究会（定款施行細則第３条３）

○東日本支部

・回数　6回（第 68 回～第 73 回　12・２・３・４・６・７月）

・会場　東京芸術大学ほか

・内容　研究発表、調査報告、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

・回数　４回（第 258 回～第 261 回　12・３・５・７月）

・会場　国立民族学博物館ほか

・内容　研究発表、パネルディスカッション、修士論文・博士論文発表ほか

○沖縄支部

・回数　２回（第 59 回～第 60 回　２・７月）

・会場　沖縄県立芸術大学

・内容　研究発表ほか

〔2〕学会誌および学術図書の刊行（定款第５条２）

（5）機関誌『東洋音楽研究』の刊行（定款施行細則第３条４）

○第 78 号の編集、刊行（2013 年８月 31 日発行）

・内容　会員の論文、研究ノート、資料紹介、書評ほか

（6）会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

・第 86 号（2012 年９月）、第 87 号（2013 年１月）、第 88 号（2013 年５月）

・ 内容　会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

・第 30 号（2012 年 11 月）、第 31 号（2013 年３月）、第 32 号（2013 年６月）

・内容　東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

・ 第 74 号（2013 年２月）、75 号（2013 年６月）

・内容　西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

・発行なし（第 35 号を支部会員にのみ配布。正式な発行は次年度の予定。）

〔3〕関連学協会との連絡および協力（定款第５条３）

（7）日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

（8）音楽文献目録委員会への参加

○会員近藤静乃、前原恵美、増野亜子の３氏を委員として派遣

（9）国際伝統音楽学会（ICTM）への協力

○日本国内委員会として加盟

(10)藝術学関連学会連合への参加

○会員薦田治子氏を委員として派遣

〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰（定款第５条４）

(11)「田邉尚雄賞」（定款施行細則第３条５）

○第 29 回田邉尚雄賞の授賞

・日時　2012 年 11 月 10 日

・受賞者および授賞対象

蒲生郷昭『初期三味線の研究』（出版芸術社、2011 年発行）

○第 30 回田邉尚雄賞の選考と発表

・ 受賞者および授賞対象

三島暁子『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』（思文閣出版、2012 年２月発行）

山寺美紀子『国宝『碣石調幽蘭第五』の研究』（北海道大学出版会、2012 年２月発行）

〔5〕研究および調査（定款第５条５）

(12)国内または国外における学術調査および研究

とくになし

〔6〕その他目的を達成するために必要な事項（定款第５条６）

(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14)独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業への参加

(15)一般社団法人へ移行後の諸制度の整備（平成 24 年９月３日に登記完了）

【添付書類２】

収 支 計 算 書 内 訳 表

平成 24 年 9 月 1 日から平成 25 年 8 月 31 日まで

（単位：円）

勘定科目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合　計
Ⅰ　事業活動収支の部							
1．事業活動収入							
基本財産運用収入	2,814	0	0	0	0	0	2,814
基本財産利息収入	2,814	0	0	0	0	0	2,814
特定資産運用収入	7,044	0	0	0	0	0	7,044
特定資産利息収入	7,044	0	0	0	0	0	7,044
入会金収入	0	0	0	0	0	0	0
会費収入	5,478,000	0	0	0	0	0	5,478,000
正会員会費収入	5,058,000	0	0	0	0	0	5,058,000
賛助会員会費収入	200,000	0	0	0	0	0	200,000
特別会員会費収入	220,000	0	0	0	0	0	220,000
事業収入	414,000	1,435,070	0	0	2,100	0	1,851,170
機関誌発行収入	414,000	0	0	0	0	0	414,000
大会広告料収入	0	754,370	0	0	0	0	754,370
大会参加費収入	0	407,500	0	0	0	0	407,500
懇親会費収入	0	246,000	0	0	0	0	246,000
食料費収入	0	27,200	0	0	0	0	27,200
その他事業収入	0	0	0	0	2,100	0	2,100
補助金等収入	0	0	0	0	0	0	0
負担金収入	0	0	0	0	0	0	0
寄付金収入	16,000	0	0	0	0	0	16,000
寄付金収入	16,000	0	0	0	0	0	16,000
雑収入	675	13,400	31	35	6	0	14,147
受取利息収入	375	0	31	35	6	0	447
雑収入	300	13,400	0	0	0	0	13,700
他会計振替額	135,872	0	558,940	384,668	42,425	△ 1,121,905	0
事業活動収入計	6,054,405	1,448,470	558,971	384,703	44,531	△ 1,121,905	7,369,175
2．事業活動支出							
事業費支出	4,575,073	1,312,598	485,228	313,947	565	0	6,687,411
給料手当支出	1,223,307	0	0	0	0	0	1,223,307
臨時雇賃金支出	0	152,210	19,550	6,800	0	0	178,560
法定福利厚生費支出	4,610	0	0	0	0	0	4,610
旅費交通費支出	401,470	32,110	0	31,020	0	0	464,600
通信運搬費支出	420,680	49,170	201,500	164,780	250	0	836,380
消耗什器備品費支出	210	48,880	0	0	0	0	49,090
消耗品費支出	36,689	0	3,517	100	315	0	40,621
賃借料支出	786,661	0	0	0	0	0	786,661
印刷製本費支出	172,125	293,073	156,681	83,937	0	0	705,816
諸謝金支出	0	430,420	50,000	10,000	0	0	490,420
租税公課支出	13,800	0	0	0	0	0	13,800
負担金支出	187,000	0	0	0	0	0	187,000
会議費支出	3,335	0	10,126	0	0	0	13,461
広報普及費支出	160,090	13,277	0	0	0	0	173,367
田邉尚雄賞支出	166,872	0	0	0	0	0	166,872
機関誌作成費支出	986,529	0	0	0	0	0	986,529
例会運営費支出	0	0	39,234	16,470	0	0	55,704
懇親会費支出	0	180,839	0	0	0	0	180,839
保険料支出	0	14,870	0	0	0	0	14,870
食料費支出（雑支出①）	0	97,749	0	0	0	0	97,749
手数料支出（雑支出③）	11,695	0	4,620	840	0	0	17,155
管理費支出	504,000	0	0	0	0	0	504,000
事務委託費支出	504,000	0	0	0	0	0	504,000
他会計振替支出	986,033	135,872	0	0	0	0	0
事業活動支出計	6,065,106	1,448,470	485,228	313,947	565	△ 1,121,905	7,191,411
事業活動収支差額	△ 10,701	0	73,743	70,756	43,966	0	177,764
Ⅱ　投資活動収支の部							
1．投資活動収入							
基本財産取崩収入	0	0	0	0	0	0	0
特定基金取崩収入	0	0	0	0	0	0	0
固定資産売却収入	0	0	0	0	0	0	0
投資有価証券売却収入	0	0	0	0	0	0	0
敷金・保証金戻収入	0	0	0	0	0	0	0
投資活動収入計	0	0	0	0	0	0	0
2．投資活動支出							
基本財産取得支出	0	0	0	0	0	0	0
特定資産取得支出	0	0	0	0	0	0	0
固定資産取得支出	0	0	0	0	0	0	0
投資有価証券取得支出	0	0	0	0	0	0	0
敷金・保証金支出	0	0	0	0	0	0	0
投資活動支出計	0	0	0	0	0	0	0
投資活動収支差額	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲ　財務活動収支の部							
1．財務活動収入							
借入金収入	0	0	0	0	0	0	0
財務活動収入計	0	0	0	0	0	0	0
2．財務活動支出							
借入金返済支出	0	0	0	0	0	0	0
財務活動支出計	0	0	0	0	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0	0	0	0	0
Ⅳ　予備費支出							
当期収支差額	△ 10,701	0	73,743	70,756	43,966	0	177,764
前期繰越収支差額	2,435,987	0	1,060	15,332	7,575	0	2,459,954
次期繰越収支差額	2,425,286	0	74,803	86,088	51,541	0	2,637,718

【添付書類３－１】

貸 借 対 照 表 内 訳 表

平成 25 年 8 月 31 日　現在

（単位：円）

勘定科目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合　計
Ⅰ　資産の部							
１．流動資産							
現金預金	2,133,605	200,000	74,803	86,088	51,541	0	2,546,037
未収金	858,000	0	0	0	0	0	858,000
前渡金	200,000	0	0	0	0	△　200,000	0
流動資産合計	3,191,605	200,000	74,803	86,088	51,541	△　200,000	3,404,037
２．固定資産							
(1) 基本財産							
定期預金	5,200,000	0	0	0	0	0	5,200,000
基本財産合計	5,200,000	0	0	0	0	0	5,200,000
(2) 特定資産							
研究推進事業基金	8,199,334	0	0	0	0	0	8,199,334
田邉尚雄基金	2,750,000	0	0	0	0	0	2,750,000
特定資産合計	10,949,334	0	0	0	0	0	10,949,334
(3) その他固定資産							
什器備品	57,159	0	0	0	0	0	57,159
書籍	310,600	0	0	0	0	0	310,600
差入敷金	300,000	0	0	0	0	0	300,000
電話加入権	149,968	0	0	0	0	0	149,968
その他の固定資産合計	817,727	0	0	0	0	0	817,727
固定資産合計	16,967,061	0	0	0	0	0	16,967,061
資産合計	20,158,666	200,000	74,803	86,088	51,541	△　200,000	20,371,098
Ⅱ　負債の部							
１．流動負債							
未払金	262,455	0	0	0	0	0	262,455
預り金	12,252	0	0	0	0	0	12,252
前受金	196,000	200,000	0	0	0	△　200,000	196,000
流動負債合計	470,707	200,000	0	0	0	△　200,000	470,707
２．固定負債							
固定負債合計	0	0	0	0	0	0	0
負債合計	470,707	200,000	0	0	0	△　200,000	470,707
Ⅲ　正味財産の部							
１．指定正味財産							
指定正味財産合計	0	0	0	0	0	0	0
２.一般正味財産							
その他一般正味財産	19,687,959	0	74,803	86,088	51,541	0	19,900,391
一般正味財産合計	19,687,959	0	74,803	86,088	51,541	0	19,900,391
正味財産合計	19,687,959	0	74,803	86,088	51,541	0	19,900,391
負債及び正味財産合計	20,158,666	200,000	74,803	86,088	51,541	△　200,000	20,371,098

【添付書類３－３】

正味財産増減計算書内訳表

平成 24 年 9 月 1 日から平成 25 年 8 月 31 日まで

（単位：円）

勘定科目	本部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合計
Ⅰ　事業活動収支の部							
1．経常収支の部							
(1) 事業活動収入							
基本財産運用収入	2,814	0	0	0	0	0	2,814
基本財産受取利息	2,814	0	0	0	0	0	2,814
特定資産運用益	7,044	0	0	0	0	0	7,044
特定資産受取利息	7,044	0	0	0	0	0	7,044
受取入会金	0	0	0	0	0	0	0
会費収入	5,478,000	0	0	0	0	0	5,478,000
正会員受取会費	5,058,000	0	0	0	0	0	5,058,000
賛助会員受取会費	200,000	0	0	0	0	0	200,000
特別会員受取会費	220,000	0	0	0	0	0	220,000
事業収入	414,000	1,435,070	0	0	2,100	0	1,851,170
機関誌発行収入	414,000	0	0	0	0	0	414,000
大会広告料収入	0	754,370	0	0	0	0	754,370
大会参加費収入	0	407,500	0	0	0	0	407,500
懇親会費収入	0	246,000	0	0	0	0	246,000
食料費収入	0	27,200	0	0	0	0	27,200
その他事業収入	0	0	0	0	2,100	0	2,100
受取補助金等	0	0	0	0	0	0	0
受取負担金	0	0	0	0	0	0	0
受取寄付金	16,000	0	0	0	0	0	16,000
受取寄付金	16,000	0	0	0	0	0	16,000
雑収入	675	13,400	31	35	6	0	14,147
受取利息	375	0	31	35	6	0	447
雑収入	300	13,400	0	0	0	0	13,700
他会計振替額	135,872	0	558,940	384,668	42,425	△ 1,121,905	0
経常収益計	6,054,405	1,448,470	558,971	384,703	44,531	△ 1,121,905	7,369,175
(2) 事業活動支出							
事業費	4,740,457	1,312,598	485,228	313,947	565	0	6,852,795
給料手当	1,223,307	0	0	0	0	0	1,223,307
臨時雇賃金	0	152,210	19,550	6,800	0	0	178,560
法定福利厚生費	4,610	0	0	0	0	0	4,610
旅費交通費	401,470	32,110	0	31,020	0	0	464,600
通信運搬費	420,680	49,170	201,500	164,780	250	0	836,380
消耗品什器備品費	210	48,880	0	0	0	0	49,090
消耗品費	36,689	0	3,517	100	315	0	40,621
賃借料	786,661	0	0	0	0	0	786,661
印刷製本費	172,125	293,073	156,681	83,937	0	0	705,816
諸謝金	0	430,420	50,000	10,000	0	0	490,420
租税公課	13,800	0	0	0	0	0	13,800
支払負担金	187,000	0	0	0	0	0	187,000
会議費	3,335	0	10,126	0	0	0	13,461
広報普及費	160,090	13,277	0	0	0	0	173,367
減価償却費	15,384	0	0	0	0	0	15,384
田邉尚雄賞関連費	316,872	0	0	0	0	0	316,872
機関誌作成費	986,529	0	0	0	0	0	986,529
例会運営費	0	0	39,234	16,470	0	0	55,704
懇親会費	0	180,839	0	0	0	0	180,839
保険料	0	14,870	0	0	0	0	14,870
食料費（雑費①）	0	97,749	0	0	0	0	97,749
手数料（雑費③）	11,695	0	4,620	840	0	0	17,155
管理費	504,000	0	0	0	0	0	504,000
事務委託費	504,000	0	0	0	0	0	504,000
他会計振替額	986 033	135 872	0	0	0	△ 1 121 905	0
経常費用計	6,230,490	1,448,470	485,228	313,947	565	△ 1,121,905	7,356,795
評価損益調整前経常増減額	△ 176,085	0	73,743	70,756	43,966	0	12,380
基本財産評価損益等	0	0	0	0	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0	0	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0	0	0	0	0
評価損益等計	0	0	0	0	0	0	0
当期経常増減額	△ 176,085	0	73,743	70,756	43,966	0	12,380
2．経常外収支の部							
(1) 経常外収益							
固定資産売却益	0	0	0	0	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0	0	0	0	0
経常外収益計	0	0	0	0	0	0	0
(2) 経常外費用							
固定資産売却損	0	0	0	0	0	0	0
固定資産減損損失	0	0	0	0	0	0	0
災害損失	0	0	0	0	0	0	0
経常外費用計	0	0	0	0	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0	0	0	0	0
当期一般正味財産増減額	△ 176,085	0	73,743	70,756	43,966	0	12,380
一般正味財産増減額	△ 176,085	0	73,743	70,756	43,966	0	12,380
一般正味財産期首残高	19,864,044	0	1,060	15,332	7,575	0	19,888,011
一般正味財産期末残高	19,687,959	0	74,803	86,088	51,541	0	19,900,391
Ⅱ　投資活動収支の部							
受取補助金等	0	0	0	0	0	0	0
受取負担金	0	0	0	0	0	0	0
受取寄付金	0	0	0	0	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0	0	0	0	0
基本財産評価益	0	0	0	0	0	0	0
特定資産評価益	0	0	0	0	0	0	0
基本財産評価損	0	0	0	0	0	0	0
特定資産評価損	0	0	0	0	0	0	0
一般正味財産への振替額	0	0	0	0	0	0	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0	0	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0	0	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲ　財務活動収支の部							
正味財産期末残高	19 687 959	0	74 803	86 088	51 541	0	19 900 391

【添付書類３－４】

正 味 財 産 増 減 計 算 書

平成 24 年 9 月 1 日から平成 25 年 8 月 31 日まで

総合計　　（単位：円）

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　事業活動収支の部			
1．経常収支の部			
(1) 事業活動収入			
基本財産運用収入	2,814	16,986	△ 14,172
基本財産受取利息	2,814	16,986	△ 14,172
特定資産運用益	7,044	10,003	△ 2,959
特定資産受取利息	7,044	10,003	△ 2,959
会費収入	5,478,000	5,509,000	△ 31,000
正会員受取会費	5,058,000	5,109,000	△ 51,000
賛助会員受取会費	200,000	200,000	0
特別会員受取会費	220,000	200,000	20,000
事業収入	1,851,170	1,312,200	538,970
機関誌発行収入	414,000	444,000	△ 30,000
大会広告料収入	754,370	445,000	309,370
大会参加費収入	407,500	153,000	254,500
懇親会費収入	246,000	248,000	△ 2,000
食料費収入	27,200	19,200	8,000
その他事業収入	2,100	3,000	△ 900
受取寄付金	16,000	0	16,000
受取寄付金	16,000	0	16,000
雑収入	14,147	473	13,674
受取利息	447	473	△ 26
雑収入	13,700	0	13,700
他会計振替額	1,121,905	1,294,186	△ 172,281
本部会計振替額	986,033	1,286,581	△ 300,548
大会会計振替額	135,872	0	135,872
東日本支部会計振替額	0	7,605	△ 7,605
経常収益計	8 491 080	8 142 848	348 232
(2) 事業活動支出			
事業費	6,852,795	6,600,523	252,272
給料手当	1,223,307	1,357,507	△ 134,200
臨時雇賃金	178,560	244,150	△ 65,590
法定福利厚生費	4,610	4,971	△ 361
旅費交通費	464,600	370,840	93,760
通信運搬費	836,380	893,675	△ 57,295
消耗品什器備品費	49,090	32,730	16,360
消耗品費	40,621	40,309	312
賃借料	786,661	737,475	49,186
印刷製本費	705,816	790,691	△ 84,875
諸謝金	490,420	214,460	275,960
租税公課	13,800	2,680	11,120
支払負担金	187,000	187,000	0
会議費	13,461	42,933	△ 29,472
広報普及費	173,367	219,470	△ 46,103
減価償却費	15,384	24,178	△ 8,794
田邉尚雄賞関連費	316,872	176,131	140,741
会場運営費	0	16,400	△ 16,400
機関誌作成費	986,529	824,912	161,617
例会運営費	55,704	125,600	△ 69,896
懇親会費	180,839	188,744	△ 7,905
保険料	14,870	4,000	10,870
食料費（雑費①）	97,749	69,487	28,262
手数料（雑費③）	17,155	27,868	△ 10,713
雑費（雑費④）	0	4,312	△ 4,312
管理費	504,000	513,450	△ 9,450
消耗品費	0	9,450	△ 9,450
事務委託費	504,000	504,000	0
他会計振替額	1,121,905	1,294,186	△ 172,281
本部会計振替額	135,872	0	135,872
大会会計振替額	0	276,587	△ 276,587
東日本支部会計振替額	558,940	567,605	△ 8,665
西日本支部会計振替額	384,668	400,000	△ 15,332
沖縄支部会計振替額	42 425	49 994	△ 7 569
経常費用計	8,478,700	8,408,159	70,541
評価損益調整前経常増減額	12 380	△ 265 311	277 691
基本財産評価損益等	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	12 380	△ 265 311	277 691
2．経常外収支の部			
(1) 経常外収益			
固定資産売却益	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
固定資産売却損	0	0	0
固定資産減損損失	0	0	0
災害損失	0	0	0
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	12,380	△ 265,311	277,691
一般正味財産増減額	12 380	△ 265 311	277 691
一般正味財産期首残高	19 888 011	20 153 322	△ 265 311
一般正味財産期末残高	19,900,391	19,888,011	12,380
Ⅱ　投資活動収支の部			
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
基本財産評価益	0	0	0
特定資産評価益	0	0	0
基本財産評価損	0	0	0
特定資産評価損	0	0	0
一般正味財産への振替額	0	0	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
Ⅲ　財務活動収支の部			
正味財産期末残高	19,900,391	19,888,011	12,380

【添付書類３－５】

附　属　明　細　書

平成 24 年 9 月 1 日から平成 25 年 2 月 28 日まで

１．基本財産及び特定資産の明細

（金額単位：円）

区分	資産の種類	期首帳簿価額	当期増加額	当期減少額	期末帳簿価額
基本財産	基本財産	5,200,000			5,200,000
	基本財産計	5,200,000	0	0	5,200,000
特定資産	基　金	11,093,334	1,715,298	1,859,298	10,949,334
	特定資産計	11,093,334	1,715,298	1,859,298	10,949,334

２．引当金の明細

（金額単位：円）

科　　目	期首残高	当期増加額	当期減少額		期末残高
			目的使用	その他	
該当なし	0				0

【添付書類７】

監　査　報　告　書

一般社団法人 東洋音楽学会

会長　薦田 治子　殿

平成 25 年 9 月 21 日

(2013年)

監 事　竹内道敬

監 事　徳丸吉彦

私たちは、平成 24 年 9 月 1 日から平成 25 年 8 月 31 日までの平成 24 年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1．監査の方法の概要

(1)　会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。

(2)　業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2．監査意見

(1)　平成 24 年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。

(2)　事業報告書の内容は真実であると認める。

(3)　理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

(4)　固定資産の中の書籍を速やかに処分することを望む。

以上